

浅井先生の御退官に当って

浅海重夫

浅井先生は昭和42年の新年度から、自然地理講座の筆頭教授として地理学科に着任された。当時の渡辺光主任以下教室一同の期待の下に、地理学のベースとしての気候学を専攻し指導される先生が迎えられるのは、真に喜ばしいことであった。またこの年は、お茶大に修士コースの講座制設置が確立された記憶すべき年でもあった。

この時すでに先生は、「やませ」の御研究以来気候と人間との相関という地理学の真隨の追求の面で、学界から高い評価を得ておられたことはここに記すまでもないが、その後つけられたアイスランドの地誌学研究をつうじて、エクメネの限界に近い辺境に高度の文明が発生し展開する過程を、詳細な実証的手法で考察され、研究室にアイスボックスを設けるなど寒冷気候の実験的究明に打ち込まれてきた。また「建物気候」と自ら呼ばれて、文教棟内の各条件下で温度湿度等を実測するいわば生活環境への応用研究は、建築学会でも多大の評価をうけられたとうかがっている。地理的事象の発生論的説明には定性的論証のみでは不十分とし、「地理量」の概念を示して土地の生産力の把握と、生産に関与する気候・地形・土壌等との対比に鋭い目を向けられた。地理学の原理を正しく且きびしく見つけ、実践的な探究に精力をそそがれる数少ない地理学研究者の一人として、われわれ後学の者は常に先生の歩みに学ぶところが多かった。とかく分布の記載のみに終り、或は雑学におちいりがちな地理学に、科学として当然のことなのだが、先生のとくに強調された「因果律」の導入の重要性について、改めて反省させられることも多かった。

先生の学生指導ぶりを拝見すると、一面では大へんきびしいものが感じられる。女子大学でも手は抜かないという姿勢を御着任以来たえず示されていたが、これはお茶大のなまぬるさを感じられた先生の暗黙の批判ととるべきだろう。他面卒論や修論の指導や演習実験等の指示の上で、時には丁寧すぎるほどの懇切さに感動と戸迷いを覚えた学生諸君もあったのではなかろうか。一方地理教育への関心も高く持たれ、卒業生の進路に教職の道をより一層開拓する努力をなされた。地理教育学会の主催する地理学科卒業論文発表の場にも、多くのお茶大生を参加させるよう推進されてきた。

先生の日常における実践主義は、合理性に基づく工夫と努力の結集として、我々の目を見はらせる実績となっていた。古物を探し出し、体裁よりも実質を重んずる精神の下に、新品同様あるいは新品以上の性能をもつ機器に作り変える。私などそのまねをしたいと思ってもせいぜい廃物利用の域を出ないので、先生の作品には悉く敬服してしまう。いつの間にか廊下の照明、非常燈、語学練習用のテーブコーダーなど、教室一同のために設え、また各器具には細かい使用上の指示を書かれるなど、

先生のお人柄がよく現われている。科学研究費からとくに廻していただいた予算で、ボーリングマシンを買うことができ、さらにその運搬や採取試料の積載のために、おそらく大学の地理教室用としては全国で唯一つ、ジープの購入が実現したのである。

御多忙な学究活動と学生指導のかたわら、51年から4年間附属高校長を勤められたが、その間の多くの御苦勞の中で附属高問題を「連絡入学」の是非という形でとりあげられている。冗長な説明を嫌われ、言葉を簡潔に内容を高揚される先生の真意が、往々にして誤解を招くことがなきにしもあらずであったが、誤解は常に必ずや解かれる将来があるに違いない。

ふり返って先生の御人柄のあたたかさときびしさを思う時、地理学の大先達でもあられた先生の御父君と、先生の最高の理解者であり、また長年にわたって教職についておられた奥様、およびお健やかな御家族の皆様に見守られ、共に築かれた御家庭のすばらしい環境がしのばれると申し上げては失礼であろうか。御定年を前にした先生にはなおお続けになりたい仕事、というより今こそ意欲をもつてとりくまれない仕事山積していることと推察する。今後は悠々自適の日々を——とお願いしても、先生のこと故変わりなく忙がしくお過しになるかも知れない。初めての巡検にお伴した時、白糸滝の滝つぼで学生たちと驚きのまなこで拜見した半ズボン姿の若々しい先生を、今でも忘れることができない。どうぞいつまでも御健康に。